

# 教育 を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

かつて日本では脚気<sup>かっけ</sup>という病が猛威を振るっていた。脚気になると心不全や末梢神経障害をおこしたり、悪くとすると死に至る。脚気かどうか識別するために、足先の届かない高さに腰掛け、ひざのお皿の下部を平手チョップする。その反動で下肢がびよんと跳ね上がればセーフ、反応がないと脚気だ、というあのやつである。

特に軍隊では脚気が目立った。例えば日露戦争（1904 - 05）に出動した陸軍の総人員は百十万人以上のうち戦死者は約四万七千名、傷病者は三十五万二千七百余名であったが、傷病者のうち脚気患者が二十一万一千六百余名にもものぼっていた。傷病者の半分以上が脚気患者である。そして脚気による死者は二万七千八百余名といわれ、これも戦死者数の半分を凌駕する。以上が陸軍のケースであるが、一方同じ軍隊でも、海軍はというと日露戦争中脚気による軽症患者は幾分出たが、重症者はおらず、ましてや死者は出ていない。

実は海軍でもかつては脚気患者の多いことに悩まされていた。例えば明治16（1883）年、九カ月におよぶ遠洋航海に出た軍艦「龍驤」<sup>りゅうしょう</sup>は、乗組員三百七十八名中半分に近い百六十



◀『白い航跡』吉村 昭著  
講談社文庫 上・下  
定価 本体各 581 円＋税

九名が脚気に侵され、しかも二十三名が死亡している。

当時この問題に真っ向から取り組んだのは、役目柄当然のことながら海軍病院長で海軍医務局副長を務めていた高木兼寛<sup>たかき かねひろ</sup>という人であった。彼は遠洋航海中の軍艦「龍驤」の乗組員の脚気発病状況に注目した。そして奇妙なことを発見する。

艦が航海中は脚気患者が出るのだが、サンフランシスコ、シドニー、ホノルルなどの外国の港に停泊中は脚気患者がほとんど出ていないのだ。航海中は白米のご飯が主食であるが、停泊中は乗組員は街に出てパンなどを食べる。彼はそこに眼をつけた。かつてイギリスに留学して実用栄養学を学んだ彼は、日本以外で脚気はほとんどないことを知っていた。軍艦「龍驤」の遠洋航海の状況証拠からして、どうやら脚気の犯人は白米であると当たりをつけた。そしてパン食組、白米食組の実験結果で脚気の犯人は白米であるという確信を得る。日本の白米を主とする食事は含水炭素（炭水化物）の比率が異様に多いのだ。それが脚気の多い原因なのだが、当時は一般には主食に白米のご飯を食べることのできる家庭は少なく、麦や雑穀

を食べていたのだ。それが軍隊に入ると白米が食べられる。国のために命を賭ける兵隊にせめて白米を食べてもらおうという国家の温情からだ。皮肉にもその温情が裏目に出ていたのだ。

高木は海軍上層部に働きかけて兵食を麦入りご飯やパンに変えるために、懸命の努力をする。それが実って海軍では脚気を撲滅することが出来たのだ。明治17（1884）年、前年の「龍驤」と同じ航路を辿って遠洋航海に出た軍艦「筑波」から、航海中に電信が届く。「ビヤウシヤ 1 ニンモナシ アンシンアレ（病者一人モナシ安心アレ）」

一方陸軍の兵食決定の中樞の一人に森林太郎（森鷗外）がいた。森はかつてドイツに留学を命ぜられ、そこで細菌学がめざましく発達をしている状況を見ているせい、脚気は細菌によるものだと、高木の栄養説に対し学会で猛反論を展開した。

結果は現代の我々が知るとおりである。本書は高木兼寛の伝記であると同時に、日本脚気史ともいえるべき本である。昔こんなことがあったんだよと、教室の余談にでもしていただければ幸いである。